性同一性障害（MTF）症例の思春期における心理と表出するアラームサイン

藤井　友紀　川上　舞子　田上　志保　溝口　祥代　山下　真由　吉田　真奈美
指導教員　中塚幹也教授

【緒言】

身体の性と性自認とが一致せず性別違和感を持つ性同一性障害（gender identity disorder : GID）は，生物学的には女性，性自認は男性である Female to Male（FTM）症例と生物学的には男性，性自認は女性である Male to Female（MTF）症例とに分類される。思春期には二次性徴による望まない性への身体変化が起こるため，焦燥感や絶望感が募り自殺念慮を持つ率も高い。このため GID の児童には，その成長に合わせた治療あるいは精神的支援が必要であると考えられるが，児童の心理を理解し，表出するアラームサインを見つけることは容易ではない。そこで今回，私達は MTF 症例に焦点を当て，思春期における MTF 症例に特徴的な心理や行動を調査した。

【方法】

1．アラームサインの項目の抽出

岡山大学ジェンダークリニックを過去に受診した MTF 症例 17 例の診療録，GID に関する著作，文献等から思春期の MTF 症例に見られる行動や心理などを抽出した。

2．思春期におけるアラームサインの調査

2007 年 8～11 月に MTF 症例 32 例を対象に，同意のもと，外来にて無記名の自己記入式質問紙を配布し，回収箱に投函する形で回収した。また，対照群(身体的性別は男性，性自認も男性)32 名に同様の自己記入式質問紙調査を行なった。統計学的解析には χ_2 検定，Mann-Whitney's U test を用い，$p<0.05$ を有意とした。尚，本研究は，岡山大学医学部保健学科倫理委員会の承認のもと施行した。

【結果】

1．アラームサインの分類

抽出した項目は，性格・心理，身体，遊び，学校，恋愛，服装の 6 つのカテゴリーに分類された。特に，身体では，「二次性徴が嫌だった」，「自分の性器を見るのが嫌だった」等，多くの項目が見られた。

2．思春期におけるアラームサインの調査

平均年齢は 36.6±12.7（mean±S.D.）[20－57]歳であった。望む性での生活（Real Life Experience）は，8 割以上が何らかの形で行なっていた。対照群の平均年齢は 30.1±10.6（mean±S.D.）[21－53]歳であった。

子どもの頃は二次性徴を強く嫌う傾向にあり，いじめや自殺念慮を経験した症例も多かった。子どもの頃の遊び方，中学生以降の服装，男性物の服への抵抗，女性物の服やアクセサリー，化粧への憧れ，女性らしい態度，子どもの頃の精神状態については，対照群と有意な差が認められた。また，子どもの頃の精神状態は対照群に比較して有意に不良と感じていた。子どもの頃，早く家族や周囲に伝えることができなかったことを後悔している者は 59.4%であり，GID の子どもを早期発見することについては，56.3%が見つけてあげる方が良いと回答した。

【考察】

子どもの頃から性別違和感を持っていた MTF 症例は，男性的なものを嫌い，女の子らしい遊び方や服装，態度をとっていたと考えられるが，自分の持つ性別違和感を言い出せなかった者が大部分であった。これらの特異的なサインは，周囲が MTF の児童に気づく契機となると考えられる。

身近な存在である家族や学校の先生に打ち明けることができずに育った経験は，子ども時代の辛い思い出であり，精神状態に影響し，後悔の念が残ったと考えられる。このような児童は，その後，自殺念慮を持つことも多いが，早期に気づき支援できれば，このような事態を回避できる可能性がある。また，このような児童に対しては，医療機関のみではなく，学校とともに協力して正しい知識の提供をしていくことが必要であると考えられる。

【結論】

MTF 症例では，子どもの頃には，性別の違和感を周囲に早く伝えることができず，後悔している者は多い。周囲の大人，特に，教師が子どものアラームサインを見つけることができれば，支援が可能であり，そのためには，GID についての正しい理解が必要である。